場所　和歌山県田辺市

面積　31.6ha



活動目的

紀南においても限られた貴重な生物の宝庫であることから、藻場の保全・再生を通じて海の生態系を保全し、持続可能な漁業を目指すと共に、地域における環境教育の場や、保全活動を通じた関係人口の増大による地域活性化を目的とする。

サイト概要

新庄海岸は、和歌山県中部にある田辺湾の最奥部に位置している。リアス式海岸であることから、岩礁と砂泥底が交互する複雑な海岸地形を形成し、藻場や干潟、小規模ながらサンゴ群種も見られるなど、多様な海洋生物が存在する他、渡り鳥の越冬地としても利用されている。申請区域周辺には、国指定天然記念物である神島や泥岩岩脈が存在する。地先では小規模な漁業が営まれており、地域の生活と密着している。新庄漁業協同組合の牡蠣養殖場は有料の釣り場としても活用されているほか、漁業体験の受け入れも行っている。また、周辺ではカヤックツアーや自然観察会なども開催されている。

土地利用の変遷

新庄の海岸では古くから地先での小規模な漁業と養殖業が営まれており、静穏な内ノ浦の奥部は一部を埋め立て漁港やマリーナとして整備されている。海岸の大半は自然海岸で、磯と干潟があることから、レッドデータブック掲載種も多数含む多様な海岸生物が見られる。2015年には吉野熊野国立公園の拡張にともない、文里港の港湾区域を除く全域が指定された。

サイト周辺の環境

田辺湾の海岸部は大半が整備されており、新庄海岸は自然海岸として最も広い。砂泥地が多いことから紀南有数の海草群落もみられるほか、申請区域の一部はモニタリングサイト1000の「南紀田辺サイト」に含まれている。海岸の後背地には照葉樹の二次林や水田雑草群落がみられる。

アピールポイント

本サイトとその周辺海域は、令和４・５年度に環境省事業の『「令和の里海づくり」モデル事業』において、新庄漁業協同組合を中心とした地域内外の企業や研究機関と連携体制を構築し、特産品であるヒロメを中心に、海の保全と利用の好循環の仕組みづくりを進めてきた。藻場の保全・再生によるJブルークレジットの認証を目指しているほか、多様な生態系と貴重な生物が多数みられることを生かして、自然環境やその調査・保全活動について、学びや体験の場としての活用を図っている。

生物多様性の価値

価値（１）公的機関等によって、生物多様性保全上の重要性が既に認められている場

【選定されている制度名】

１．環境省　生物多様性の観点から重要度の高い湿地　重要湿地No.360
　　南紀白浜から南紀田辺
２．環境省　生物多様性の観点から重要度の高い海域　沿岸域13202
　　田辺・白浜・御坊周辺

【選定理由や内容】

１．南紀白浜から南紀田辺、海草・海藻、ガラモ，クロメの群落が形成される。
　　種の多様性が高い。
　　南紀田辺（田辺湾）、底生動物、シオヤガイが多く，潮間帯ではまれな
　　ワダツミギボシムシが生息する。種数が多い。

２．白浜～田辺湾までの海岸には、ガラモ、クロメなどが生育する種の多様性が高い
　　藻場が広がり、白浜鉛山湾、瀬戸周辺はサンゴ類の多様性が高い。田辺湾は
　　シオヤガイが多く、潮間帯では希少ななワダツミギボシムシが生息する。



写真の説明：マメタワラのガラモ場



写真の説明：アマモ・コアマモ群落

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

当該海域の岩礁には、食用海藻であるヒジキやヒロメの他、マメタワラなどによるガラモ場が、砂泥地にはアマモ場が広がっている。ヒジキ藻場やヒロメ藻場は、漁業者によってスポアバッグやウニ駆除等の保全活動が行われており、採貝、採藻、刺し網、釣りなどの漁場としても活用されている。また、当該海域ではレクリエーションとしての釣りや、シーカヤックのツアーも行われている。

【主な植生】

・砂泥地：アマモ、コアマモ
・岩礁：ガラモ場、ヒロメ藻場

【確認された主な動植物など】

サイト全体では海草藻類32種、無脊椎動物164種、鳥類27種が確認されている。
そのうち主な種類は以下のとおりである。
・海草類：アマモ、コアマモなど5種類。
・緑藻類：ヒトエグサ、ボタンアオサ、ミル、ナガミル、ヒラミル、カイゴロモの6種類。
・褐藻類：ウミウチワ、カヤモノリ、ヒロメ、ヒジキ、ヒイラギモク、マメタワラなど11種類。
・紅藻類：アマノリ類、フクロフノリ、フダラク、ムカデノリ、カギケノリ、シラモなど9種類。
・イシサンゴ類：ハナガササンゴ、オオスリバチサンゴ、キクメイシモドキなど6種類。
・貝類：スガイ、ホソウミニナ、アラムシロガイ、カリガネエガイ、ミミエガイなど75種類。
・多毛類：タマシキゴカイ、チンチロフサゴカイ、ウズマキゴカイなど11種類。
・甲殻類：コメツキガニ、ガザミ類、ユビナガホンヤドカリ、コブヨコバサミなど21種類。
・多毛類：タマシキゴカイ、チンチロフサゴカイ、オニイソメ、ウロコムシなど11種類。
・鳥類：クロサギ、イソシギ、マガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オオバンなど20種類。



写真の説明：ヒジキ漁



写真の説明：カヤックツアーでガラモ場観察

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

本サイトは、黒潮の影響を色濃く受ける紀伊半島南部において有数の閉鎖性海域である。リアス式海岸であることから、岩礁域には海藻群落やイシサンゴ類が見られ、その周辺の砂泥底や湾入部の前浜干潟には、砂泥地を好む海草群落や希少な動物が数多く見られる。また、渡り鳥をはじめ、希少な鳥の餌場としても重要な海域である。

【確認された希少種】

サイト全体で、環境省レッドリスト2020及び和歌山県レッドリストに掲載された希少な動植物は22種である。

【海草類】　１種
【巻貝類】　５種
【二枚貝類】８種
【甲殻類】　５種
【多毛類】　２種
【イシサンゴ類】　１種

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容

＜活動目的＞
　紀南においても限られた貴重な生物の宝庫であることから、藻場の保全・再生を通じて海の生態系を保全し、持続可能な漁業を目指すと共に、地域における環境教育の場や、保全活動を通じた関係人口の増大による地域活性化を目的とする。

＜活動内容（脅威と脅威に対する対策含む）＞
　全ての申請区域において、春～夏にかけて海草の生育状況および磯・干潟のベントス調査と観察会を実施し、現状を把握するとともに出現生物を記録する。その他、区域ごとの活動を以下に示す。
区域A：ヒジキ群落では5月に磯磨きとスポアバッグ、8月にウニ駆除を実施。冬季はカモ類の休息・餌場としての利用状況を記録する。
区域B：ヒジキ群落（区域Aと同様）・ヒロメ群落では、11月にウニ駆除、春に母藻の沈設やスポアバッグを実施する。SCUBA潜水による海藻、サンゴ群集、その他海中生物の観察を行う。
区域C：モニタリングサイト1000の干潟サイトでもあり、過去にはレッドリスト掲載の希少種も多数確認されていることから、ベントスの調査を重点的に実施する。

＜実施体制、計画の点検、見直し＞
　新庄漁業協同組合の組合員が中心となって、これらの保全・利用活動その他維持管理作業を行う。藻場についてはヒロメラボと、アマモ場については和歌山工業高等専門学校と協働で実施する。
　生物のモニタリングや藻場の状況、その他環境の変動などを考慮し、適宜軌道修正や追加的に必要な作業を実施する。これに加えて、５年毎に活動計画を改定する。

モニタリング計画の内容

【モニタリング対象】
区域内で見られる底生生物、海草藻類、イシサンゴ類、鳥類全般を対象とするが、特にレッドデータブック掲載の希少種については重点的に調査する。

【モニタリング場所】
区域ABCの３区画の各地点で行う。

【モニタリング手法】
磯と干潟は徒手採捕による目視観察。
アマモ場は、目視による面積の確認と、方形枠での被度調査。
藻場は潜水による目視観察。鳥類は定点での目視観察。

【モニタリングの実施時期及び頻度】
磯、干潟、アマモ場は5～7月に各地点1回。
藻場は3月に1回。
野鳥は通年、渡り鳥については11～4月に月2回程度。

【モニタリング実施体制】
磯・干潟の調査は、観察会の他、専門家を呼んで実施する。
アマモ場や藻場の調査は、ヒロメラボが中心となって実施する。
野鳥の調査は、地域の野鳥観察グループと協働で実施する。
不明種については、県内の大学・博物館等の有識者に確認する。